



わが国とアメリカとの関係

ロイター電はアメリカ合衆国から非常に憂慮すべきニュースを伝えている。アメリカとの関係は開戦以来、たしかに良いと言えるものではなかった。敵国に弾薬その他の武器類を供給しているのはアメリカの工場であるし、敵国に戦争の遂行に必要な資金を前貸しているのはアメリカの銀行なのだ。アメリカの支援がなければ敵方は数ヶ月後には講和の申し出をせざるを得なかったはずだ。何十万人もの勇敢なわが同胞の血の代価をアメリカ政府と企業に支払ってもらわねばならないのである。

この機会に、似た状況でわが国がアメリカに対しどのような態度を示したかを確認することは大事である。米西戦争においてはドイツからスペインに向けて武器の輸出はすべて禁じられ、これによって自国に大した鉄鋼業のないスペインはアメリカに対して非常に不利となったのである。しかし、「不義理は世の習い」とは今回の戦争で何度も実際例を見た古くから

のことわざである。

アメリカから敵国への物資供給については、結局のところわが国はあきらめてしまったようだ。

しかし合衆国からは次々に問題を突きつけられている。アメリカ政府は、少しでも機会をつかむとわが国を妨害しにかかるのである。ドイツの私企業が所有するセイヴィルの無線送信所を通して戦場での状況の真実が外国に伝わるのが敵方にとって不快なものとなったとき、この送信所はささいな口実でアメリカ国家の監督下に置かれたのである。

これに対しイギリスについては、アメリカは国際法上のどんな違反も見逃している。時々形式的に腰砕けの覚え書きを出すこともあったが、これに対してイギリスは答える必要はないと見なしたのだった。通常のアメリカ貿易の大半は、イギリスの恣意的な封鎖と戦時禁制品規制によって無茶苦茶にされてしまったが、武器産業は現下のアメリカで実権を握っているようで、アメリカ政府はシュワブとかモーガンとかいう者の吹く笛にのって踊らされているのである。

独米交渉を切れ目なく貫く鎖として、わが軍のUボートの活動がある。これはわが国の所有する敵が防ぎようのない武器である。武器を運搬していると立証できるようなさまざまな船舶（ルシタニア号を見たまえ）を沈めたとき、残念ながら事前の警告にもかかわらず、それらの船を利用した罪もない乗船客の命が失われた。このことをもっとも残念に思ったのは他ならぬドイツの人たちなのだ。アメリカはこの撃沈に抗議して、交渉は二転三転し、ある時は合意に達するかに見えて、またある時は外交関係の断絶の瀬戸際に立った。こうする間に弾薬輸送をする者は、攻撃を妨害するため、当該の船舶にアメリカ「市民」を乗船させることが当たり前のことになっていた。紛糾の新たな種となったのである。

最終的に、わが国は武装していない船舶を事前の警告なしには撃沈しない用意があると宣言した。アメリカ政府は、武装した商船を軍艦として扱うというわが国の見解を無視することはできないと考えたようで、わが国

とアメリカとの合意にほぼ達するかに見えた。しかし、敵国からの抗議を受けて、アメリカ政府は突然踵をかえたのであった。

武装していない船舶は警告なしに撃沈することはないというわが国の約束は守られたようで、当地で得たニュースが正しければ、旅客船にはさらに特別の斟酌がなされた。

その後、英仏海峡汽船の「サセックス号」とオランダの旅客船「ツルバンチア号」が沈没した。その原因を敵国はもちろんわが軍のUボートのせいにしたのである。アメリカ政府の中立性と不偏不党性に特徴的なことは、敵の見解をそのまま直ちに自分たちの見解としたことである。わが国はUボートが2隻の沈没に無関係であることを証明したようなのに。ロイターはアメリカがドイツに、直ちに現在行っているUボート戦略を中止するように求めていると伝えている。事実はロイターの伝えている通りであるか確認できないが、他の通信社のニュースからは、現在わが国とアメリカとの関係は以前に増して緊迫したものとなっていることが伝わってくる。願わくば、わが国の政治家がアメリカとの決別をうまく避けてほしいものだ。むろん、Uボートのような武器をやすやすと手放すことは、最近の帝国議会の会議の状況から判断して、国民の意思では決してない。確かにわが国はアメリカの願望に絶えず沿ってやってきた。それは敵の数をさらに増やすことを恐れているからではなく、この戦争がさらに大きく広がることを避けるためなのである。わが国のこの努力が将来も成果を上げられるかは、ひとえにアメリカの政治家の見解と良識とにかかっている。

復活祭の展覧会

最初、手工品展覧会が計画されているのを初めて聞いた時、自分自身、悲観的な性分であるので、思わずそんなことはできまいと笑いをこらえずにはいられなかった。きっと展覧会用に適したものをこしらえることので

きる者は、誰も見つからないだろうと思ったのである。展覧会の目的については、何の疑問もなかった。収容所内で無為のままにいる多くの労働力に有益な職業的作業の機会を与え、その能力について全体的な様子を知り、できれば日本人にもドイツ人の能力の見本を見せることである。しかし利用できる金銭は少ないし、材料も不足のうえ設備が不十分で、道具が不完全なものであるために、もともと活動の範囲は狭く展覧会の成功には疑問符がついたのである。

そんなわけで、期待はほとんどしていなかったのだが、最初の印象からはかきにそれを凌駕するものであった。いつもは無味乾燥な監視将校の居室が彼の理解を得て、打ち解けた雰囲気を持った小展示室に変貌して、これによって展示物がずいぶん見映えするものになっていた。それらは全般的にいて、丁寧かつ堅実な仕事ぶりで、欠陥の多い東洋の手工業とは異なっている点が喜ばしく、ただただ賞賛するばかりである。確かに評論的観点からすれば、芸術であるべきところが、作為的にすぎると言いたくなるものがいくつもあった。しかしそれは、ドイツでも手工業が陥ることの多い欠点である。

次に、個々の作品を見てみよう。一番驚かされたのは、ブーフマンの2枚の油絵であった。その2枚の海の絵で、波立つ海と空気と雲とがそのままの色遣いで表現されていて、海洋画への彼の才能を認めざるを得ない。シュミートの美術工芸的スケッチは、もともと彼が舞台の描画やプログラムの作画ですでにこの領域での自身の技芸を十分に見せてきているので、目新しいものではなかった。それにしろ、装飾的な色彩の線や面を新たにつぎつぎと考え出すことに驚かざるをえない。

大変な細かい作業を続けることで生み出されたものは、ブッツマンとクラールの4本マスト船とホーンのヨットである。これらの模型は細部に至るまで細工がなされていて、ともに最良の展示品のひとつである。

模型は全体的に多数にのぼった。ミューリッヒとショルンの風車と付属施設、ケスラーとギュンシュマンの2階建てハーフティンバーの民家、ロー

レンツの穀物荷揚げ機、ストリーツェルの農機具、Fr. ヴェーバーの階段、これらはすべて制作者が有能な専門家であることを示す作品である。

金属加工品については、主に売買を意図して作成された装飾品と日用品であった。銅、真鍮、錫および鉄製のたばこ用具、灰皿、筆記具、額縁、浅皿で、出品者はクレックナー上等兵曹、グローセ、ベーマー、ラングロック、メラー、ヴァルターおよびヴェンデルであった。

手芸品も出品されていて、バウアーファイントの刺繍、フレーベルの手織りの毛布。ドルトとハインツェルは焼き絵を試みたが、使用した木材が適当なものでなかったため、絵がいくぶん不明瞭になっていた。

クローゼは舞台用の^{かつら}鬘を展示していたが、それらは必要に応じて紛れもない海砲兵が顔を赤らめる麗しきグレートヒェンになったり、白髪の老人になったりするものである。

堅牢な手縫いの靴はケルナーの製靴工房の製品であった。最後にももちろんピラスのおいしいケーキにも言及しなければならない。私はすぐにでも手を出したいぐらいであった。

展覧会は所長が見るからに大きな関心を示して視察をおこない、そのほかに何人かの将校、商業学校と工業学校の教師と職人の親方が数人来ていた。全員展示品の多彩さに驚いていた。残念ながら早々に撤去されてしまい、外部からもっと来ることを狙っていたのが、できなくなってしまった。全体として展示会は大成功であり、この収容所内に力量ある多くの者がいることを示したのであった。展覧会をここで開くのはこれっきりであってほしいので、結論としてこの展覧会から第2回への教訓を引き出す必要はない。

収容所展望

収容所にとってつらい出来事があった。カラスのヤーコプが復活祭の初

日に姿を消したのだ。ここで一番気分良く暮らせた当の彼が、ここを去らねばならないとは。学校の横の道を何の気なしに歩いている時に、荒々しい手に捕まれ、縛られて連れていかれて、その後どうなったかわからないのだ。彼の行方を求めて手をつくしたが、むなしく終わり、彼のことはあきらめざるを得ない。新しいきれいな鳥かごが、彼のために用意されていたが、ひょっとしたらそこから逃れたかったのかもしれない。学校の垣根の側の大きな鳥小屋には、鷹が唯一の住人となって暮らしている。ヤーコプの代わりはすぐに見つかった。卵探しからの帰り道、子供たちが巣から落ちたカラスの子を持ってきたので、連れて帰ったのである。そのカラスの子は、熟練した人の手によって世話を受け元気にしている。

復活祭の祝日は、順調に推移した。最初の日は、一日中曇っていたものの、庭園コンサートは開催できた。ただし気分的に、湿っぽい天気の影響を受けたが。第1日目の展示会が大成功であったことは、今は言及するだけにしよう。他の場所で報告されていることであるので。2日目は、お天道様がもう少しましな天気を意識してくれたみたいで、予定の卵探しを行うことができた。眉山の脇尾根の、平野にせり出しているところで卵の隠れているのを見つけることができた。この後さらに、鍋たたき、スプーンレース、二人三脚、瓶通信などの愉快的なゲームを楽しむことができた。選手、観客ともども他の全てを忘れ、愉快で無邪気な娯楽に興じさせてくれる数時間であった。なかなか思い通りになってくれない鍋をもう少しのところで打ち損じたり、先頭のがゴールの寸前で卵をスプーンから落としたり、足をゆるく結わえた二人組が坂道を転げ落ちたり、一番言うことを聞くはずの馬車馬が瓶をひっくりかえしたりした。一方こんな余興が性に合わない者は、ただ座って、暖かい春のうららかな日の魔法に身をゆだねさえしておればよかった。眼前の世界は大きく広がっていたが、自身は世間から隔絶している感じがした。だが、ここまでにしよう。さもないと、自然賛美に没頭してしまいそうになる。

この前の金曜日、地面から激しく突き上げられて収容所の建物が揺れた。

この国では、地震はありふれた現象であることを思い知らされることであった。

土曜日に、またしても時間外の点呼がかかったが、全員そろっていた。どうやら異常事態を報告した歩哨は、幽霊を見たようである。

休養をとる必要が大いに生じたために、ある男が火曜と水曜に日本の衛兵所の一室を与えてもらったが¹、戻ってきてから明かりが暗く、食事も不十分と文句を言っていたので、彼を第1号として真似をする者はほとんど出ないであろう。

靴の修理は、今後収容所内で行われることになり、新品の靴も作られる。以前の穀物運搬器具置き場が製靴作業所に模様替えされたのである。

シラー牧師がおととい、復活祭のミサを挙げられた。これに引き続き、聖餐式が大勢の参加者のもと行われた。夕闇の中、共同丸の船上の人となった牧師に、手を振って別れを告げたのであった。

第 36 回コンサート

演奏曲目

- | | |
|---------------------|------------|
| 1. 歌劇『白衣の貴婦人』序曲 | ボワエルデュー |
| 2. 「春の目覚め」 | エマヌエル・バッハ |
| 3. ワルツ「ウィーンの森の物語」 | ヨハン・シュトラウス |
| 4. メドレー「流行歌選集」 | リンケ |
| 5. 行進曲「君と僕、ミュラーの雌牛」 | |
| 喜歌劇『離婚した女』より | レオ・ファル |

好天の場合、コンサートは戸外で行う

4時半開演

1 衛兵所内にある営倉（旧陸軍で使われていた懲罰のための簡単な牢）に入れられたのである。

イギリスの自己認識

言葉だけで人を殺せるものなら、イギリス単独でも最後のドイツ人まで殲滅するという難しい問題をとっくに解決していたことだろう。イギリスが同盟国に軍事的支援を送ることができなかつたり、そのつもりがなければ、その分新聞がドイツ人への冒涇とフランス人、ロシア人、イタリア人の賛嘆すべき勇敢さへの称揚をするのである。イギリスによるこの種の支援は気にせず眺めていてよい。というも吠える犬は噛まないからだ。

言葉は、時として狙った人から跳ね返ってきて、矢を射た人自身のむねに刺さる矢のようなものである。

この好例が有名なシャーロック・ホームズの産みの親、サー・コナン・ドイルで、彼はいま口げんかで一番声を張り上げているのである。

12年ほど前に出版されたボーア戦争に関する著書の『戦争の前夜』という章でドイルは、インドからの支援を除いて謝意とともに受け入れられた支援について述べている。ドイルは言う。「というのも、これは白人の戦争となるべきものであって、ブリテン人が自分自身で身を助けることができなかつたら、巨大国家をそのような人種から引き離しても良かったのだ。15万人の兵を擁し、幾多の連戦錬磨の老練兵もいるすばらしいインド軍は、この理由から使われないでいたのである。あえて手をつけなかつたからといって、イギリスはそれを自慢しはしなかつた。しかし偏見のない作家であればおそらくこう尋ねるであろう。わが国の公德心への敬意並びに、わが国の原則と歴史の知識に対する敬意に偏狭固陋な外国の批評家のどれほどが、ドイルと同じような自己拒絶に賛同したのだろうか。

コナン・ドイル氏には、上のように述べてもらったことに感謝するほかない。なぜなら今日、この発言からの帰結として言えるのは、「すばらしいインド軍」のみならず、それ以外のズールカフファー人にいたるまでの半野蛮人や野蛮人を多く今回の戦争でわがドイツ軍と戦わせているのであるから、「そのような人種から巨大国家を引き離して」良い時期なのである。

この戦争はボーア戦争以上に「白人の戦争」であるはずなのだ。

ドイル氏よ、今は御国の公德心と名誉ある原則を奉ることは難しいよう
ですぞ。

カメルーンの防衛（1）

『フランクフルト・ツァイトウング』からの記事

ロイター電によるとカメルーン防衛の拠点、ヤウンデが1月1日に敵の手に落ち、カメルーンのがわが守備軍は武装放棄せず、戦闘をしながら退却していったとのことである。

このニュースは、イギリス軍とフランス軍が協調して三方からきわめて強力な兵力をヤウンデに向け集中させていることが知られている今となつては、驚くことではない。ヤウンデの陥落がわが守備軍の降伏に結びつくことになるのか、それともさらに先まで防衛に成功するのか、ここからは展望できない。守備軍が差し迫った包囲網から逃れたという事実は、ヤウンデの陥落が予見されていて、新しい防衛拠点が早期に準備されていたことを推測させる。

もう少し前まで、わが軍にとって情勢の展望は明るいものであった。カメルーンから隣接の中立地帯へ私信によってニュースを得ていた中立国の人物から、1915年11月初旬に情勢に関して次のような手紙が送られている。「ドイツの敵国は、以前から周知のごとくカメルーンの防衛にとって重要なヤウンデを一年前から征服しようとかかっていますが、これまでのところすべて失敗しています。彼らの力を結集してドイツ人をはるかに圧倒することができて、その後まもなくドイツ側からの反撃が成功して、また押し戻されています。物資が窮乏してはいます。食料もそうで、原住民地域のあちこちが飢えに瀕しています。しかしドイツ守備隊の勇氣は萎えていません。彼らも何とかする術を心得ています。トウモロコシの粉か

らパンを焼いています。これにはカメルーンではKパンという名前がつけられました。トウモロコシを炒ってkコーヒーが作られています。ジャガイモの栽培も成果を上げ、石けんはパーム油から製造されています。ウーテ族の楯の丈夫な革は耐久性のある靴底に加工されています。自家製の葉巻も欠乏していません。清涼飲料水としてレモン水の醸造が行われています。家畜もまだ十分いるようです。」少なくとも、届けられた手紙の一通には、カメルーンがスペイン領リオ・ムニ地域の肉が欠乏している町に家畜を贈ったことが感激的に述べられている。このスペイン領、とりわけフェルナンド・ポーでは、イギリスが情け容赦なくスペイン国籍の船を拿捕して、スペイン植民地へのあらゆる輸入を妨げているために、イギリス人への反発が広がっているのである。

カメルーン守備軍の勇敢な態度はスペイン人の間に非常に大きな感動を呼んだ。手紙のひとつを言葉通り翻訳すると：「カメルーンがいまなおドイツ領であるのは、まさにその勇敢な守備軍がいるおかげである。ドイツ中の人はいざ英雄を自慢してよい。戦後のいつか公文書が開かれるとき、世界中の人はドイツ人の力、ドイツ人の勇気、ドイツ人の粘り強さと忍耐力がカメルーンで圧倒的な敵の勢力に対してどれほどのことを成し遂げたかを知り、驚嘆することだろう。同盟諸国はすでに何度もカメルーンの陥落を予言してきた。1914年11月にはイギリスのある高級将校が、1915年1月にはカメルーンの地にはドイツ国旗が翻ることはなくなっているだろうと述べていた。1915年8月には同盟軍指揮官のドゥベル将軍が私の知人に、1915年10月には自分はヤウンデにいることだろう、そしてカメルーンの命運は最終的に決まることだろうと述べた。今10月末だが、勝利の予言はそれほど確信のあるものではなくなり、今は、カメルーンのドイツ人はもう4、5カ月ねばるのではないかと言われている」。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 107 問の解答

- 1) Db1 - g1 任意の手
- 2) D か S で詰み

第 108 問の解答

- 1) Sf3 - e5 Kf4 x e5
- 2) Dd3 - e3 任意の手
- 3) S で詰み
- 1) 上記以外の任意の手
- 2) Se5 - g6 + あるいは
- 2) Le7 - g5 + など

正答を Jos. ヴェーバーが送ってくれた。

第 109 問

白 : Kf2, Db6, Ta4, e8, Lb7, h6, Sd1, d5, Bc3, h5

黒 : Ke4, Dc4, Te5, Bb2, f6

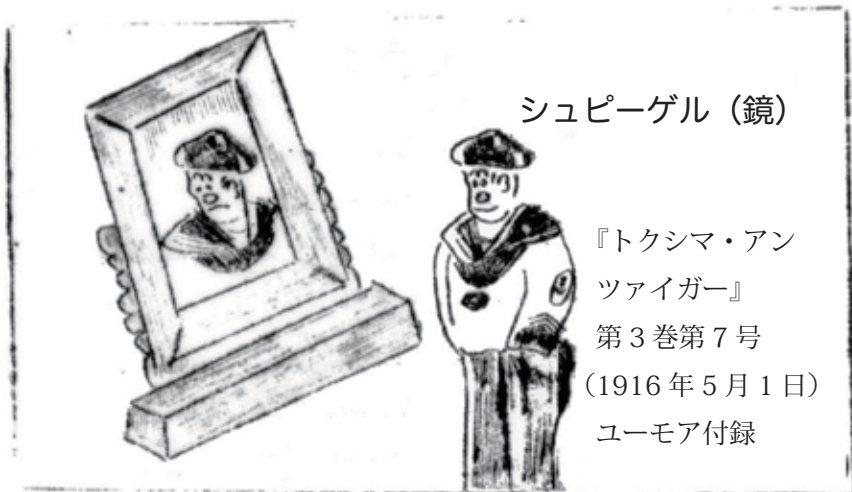
2 手詰め

第 110 問

白 : Kh6, Dh8, Th1, Le2, Sd8, Bc4, e6, g4

黒 : Kf4, Sc5, Be3, e4, e7, h2, h7

3 手詰め



復活祭のセレナード

「ライン河のケルンよ、
おまえは美しい町だ」



世界オーケストラ

世界はオーケストラにほかならない、
と偉大なるコッツェブーはかつて言った。
友よ、君は音楽が好きだから、
私の言うことを聞いてくれ。
冗談か真面目、どちらに理解されるにしろ、
私の比喩は真実なのだ。
地上での人間存在全体は、
コンサートなのだ。
私の詩で示してあげよう、
いろいろ不協和音があっても、
最初から最後まで
人生の輪舞はハーモニーなのだ。
総譜が開かれ
楽器の音合わせが終わり、
マエストロは譜面台を叩いて尋ねる、
いつコンサートは始まるのかと。
人生はコンサートと同じように、
序曲で始まる。
それもごちゃまぜで、
作曲家の思うがままになっている。
赤ん坊はトランペットさながらに叫び、

父のよろこびはティンパニーの音さながら、
しかしフルートのような優しい声で、
母は子を子守歌を歌って寝かしつける。
男の子はアレグロの序奏を始め、
天にはヴァイオリンがいっぱい、
彼の存在は — 間奏がなく —
セラフィーヌの歌に似ている。
不協和音も何のその、
スケルツァンドで晴朗な心は
楽しい仲間たちのロンドの中で
人生の第1楽章を演奏していく。
若者となりプレストではげしく、
世の中へと足を踏み入れる。
しかしその後は何と悲しいこと、
いまわしい金が歩みを妨げる。
自由のために華やかに空想は駆け巡り、
愛のためにヴィオラ・ダモーレを手にして
甘ったるいアリオソで歌う。
調性はあるときは短調、あるときは長調。
優雅な音型できらびやかに、
あるときはトリルとモルデント、
あるときはパッセージにスタッカート、
カデンツ、ルラード、トレモロを弾く。

愛の喜びと悲しみを知るようになると、
たっぷりと前奏曲を奏で、
二人して前打音付きで
至福のユニゾンを演奏する —
しかしああ、いがみ合い、罵りあい
日々の前奏曲となって、
夫婦の幸せはフーガとはならず、
めいめいアドリブでの演奏となる。
しかしお前たちは幸せだ、もし共に死んで
ピアノとフォルテが手をたずさえ、
お前たちの人生を音楽にして、
お互いを対位法で理解し合えたならば。
なぜなら楽しいアルペジオも
完全にデクレシェンドになるまで、
最後にはかろうじてピッチカートと
トレモロで弾けるだけ。
さておしまい、大フィナーレ。
急いで楽譜をめくって。
人は地の谷から
永遠の甘き歓喜へと逃れる。